

## 第二部

### 古代史・存在論・「世紀末ウィーン」

「グローバル化時代の多元的人文学」に想う  
宮沢賢治と「銀のモナド」  
アメリカの「世紀末ウィーン文化」研究書

鎌田元一  
伊藤邦武  
西村雅樹

## 「グロ - バル化時代の多元的人文学」に想う

鎌田元一

「グロ - バル化時代の多元的人文学の拠点形成」を大テ - マとして、歴史学を中心とする分野では次の4つの研究会が組織されている。

1. 15・16・17世紀成立の絵図・地図と世界観
2. 東アジアにおける国際秩序と交流の歴史的研究
3. 歴史としてのヨ - ロッパ・アイデンティティ
4. 王権とモニュメント

それぞれ学外研究者や外国人研究者とも提携しつつ、独自の課題・切り口のもとに活発な研究活動を展開しているが、その具体的な趣旨・活動内容については後文の研究会ごとの報告に委ねることとし、ここではもっぱら、日本古代史研究者として「王権とモニュメント」の研究会に参加させていただいているという個人的立場からの所感をつづることとしたい。

今日、政治・経済・文化の各方面において、特にアメリカの基準・価値観に基づくグロ - バル化の波が著しく、そのことが世界各地においてさまざまな作用・反作用の現象を引き起こしているが、歴史的にも、その時々「世界」の規模に応じて、各時代・各地域に同様の現象が見られた。我が国の位置する東アジア地域の古代にあっては、6世紀末に始まる隋唐帝国の形成とそれが周辺諸民族に与えた圧倒的な影響を、その代表的なものとしてあげることができる。この隋唐の対外関係は、その国家制度や先進文化を一方向的に波及させる機能を帯び、その冊封政策や羈縻政策を通じて、中国を中心とする一個の体制としての東アジアの国際秩序が形成された（鈴木靖民「東アジアにおける国家形成」『岩波講座 日本通史』第3巻 1994年）。我が国における国家形成もまた、隋唐帝国の成立とその膨張政策が引き起こした大きな運動の一環として、朝鮮三国間の存亡をかけた激しい抗争と深く絡み合いながら進行したのである。

4世紀ごろ以降、倭（ヤマト）王権を中心に形成され、次第に制度的な整備を伴ないつつ成熟の度を増してきたこの列島の政治社会は、東アジア世界における政治的・軍事的緊張の高まりのなか、そのような世界の新情勢に対処すべく、幾度かの権力闘争を経ながら七世紀末、中央集権的な古代国家（日本国）へと変貌を遂げる。その際に国制の基本として採用されたのが中国において秦漢以来発達を遂げ、隋唐にいたって体系的に整備された律令法であった。隋唐帝国

の出現・膨張に伴ない、周辺諸民族のなかには、独自の律令法典編纂の有無にかかわらず、律令の諸制度を摂取し、律令国家を形成したものが少なからず見られる。七世紀の統一新羅や八世紀のはじめ中国東北部に起こったツング - ス系の渤海がそれで、朝鮮半島では新羅のあと十世紀に起こった高麗も律令制による国家を形成した。また十世紀のはじめに渤海を滅ぼした契丹族の遼、さらには十二世紀はじめ遼に替わった女真族の金も律令国家を形成している。唐の政治制度や思想文化を基準とする当時のいわば「グロ - バル化」の波のなかにあつて、そこに形成される文明的世界秩序のなかに参画し、みずからを位置付けていくには、律令制の摂取が共通の重要な課題となっていたことが知られる。そのようななかにあつて、日本は唐に朝貢しつつも冊封は受けず、新羅などを朝貢国とする東亜の小帝国をめざして独自の律令法典を編纂したのである。

そのような律令法に具現される皇帝の支配をこの地上に視覚化し、皇帝と官僚の居所として営まれたのが都城である。前記の統一新羅や渤海でもそれぞれ独自の都城制を形成しているし、また体系的に律令制が導入される以前にあつても、中国都城の影響を受けつつ高句麗・百済・新羅それぞれに個性的な都城の発達が見られる。日本では律令制に基づく国家形成と都城の造営とが密接な関係にあり、藤原京以降、歴史的風土の違いにより城壁を欠くという重要な相違はあるものの、ある意味、理念的には最も忠実に中国の都城を模した帝都が発見された。

「王権とモノメント」の研究会では、多元的人文学の見地から見たグロ - バル化の諸現象を具体的に捉えうる一つの有効な手段として、時代・地域を問わず世界中に存在するモノメントと王権との関係を解明することを目的としているが、当面は、日本および朝鮮半島の古代都城とその周辺のモノメントを研究対象としている。そこに包摂される関心の有りようは広範囲に及ぶが、「グロ - バル化時代の多元的人文学」の意味の一つが、独自の歴史的・文化的伝統を持った地域の目で、それら諸地域がそのグロ - バル化の流れをどのように受けとめ、どう積極的に対処したかを検証することにあるとすれば、隋唐帝国周縁の律令国家群がそれぞれ律令制をどのように摂取し、内在化させていったかという視点から各国の都城制を比較・検討することは、それに応える一つの大きなテ - マとなりうるであろう。

一方、東アジアの古代におけるグロ - バル化の問題を考えると、重要な位置を占めるものに仏教がある。隋唐帝国周縁の律令国家群はまた普遍的宗教としての仏教を共有しており、それを通じて一つの文明的世界が形成されていた

と言ってよい。日本では六世紀中葉、欽明天皇の時代に百済の聖明王から仏像・教典がもたらされ、その信仰が勧められたと言う。その受容をめぐることは蘇我氏と物部氏・中臣氏ら排仏派との争い、いわゆる「崇仏論争」があったとされるが、推古朝の遣隋使派遣前夜の動きとしてこれを見ると、中国を中心とする文明的世界へ乗り出すにあたっての逡巡として興味深い。その意味で、『日本書紀』が、みずから律令国家体制の出発点と位置付けたいわゆる「大化の改新」にあたり、天皇の仏法守護を宣明した「仏法興隆の詔」を配していることが注目される（大化元年八月癸卯条）律令制の導入による国家形成と仏教の受容とが一体のものとして積極的に位置付けられているのである。その後仏教は王権を支える重要なイデオロギ-として、律令国家が成立する七世紀末には国家仏教としての性格を鮮明にするにいたる。

このような理解に立つとき、東アジアの古代世界における王権のモノユメントとして、寺院（遺跡）の研究が、都城と並んで、また都城との関係において重要な位置を占めることが知られる。研究会では、上記のとおり、当面の研究対象を日本および朝鮮半島の古代都城とその周辺のモノユメントとしているが、その「周辺」とは具体的には主として寺院を指している。それは特に平安京において京内には東西両寺を除き寺院の造営が認められておらず、多くの寺院が京外周辺の地に営まれたことにもよるが、本質的には律令制の導入と仏教受容との間に見られる上記のごとき関係に基づくものと理解している。

私は以上のような理解のもとに本プロジェクトによる共同研究に参加させていただいているのであるが、各時代・各地域におけるグロ-バル化の様相を明らかにし、相互に比較・検討するといっても、まず重要なのは個々の地域・個々の事象に対する実証的研究の積み重ねである。この地道な作業の継続なくしては、その比較研究・共同研究そのものが一時の徒花に終りかねない。研究拠点形成という点に関しても、数世代先までも見越した長期的・持続的視野に立っての取り組みこそが求められていよう。この財政窮乏下に貴重な国民の税金を使って行われるプロジェクトであることを肝に銘じ、少しでも後世に残る学術的遺産を生み出せるよう、自戒していきたいと思う。

## 宮沢賢治と「銀のモナド」

伊藤邦武

わたしたちの21世紀COEプログラムのテーマである「グローバル化と多元性」という問題を、いわゆる現代世界における政治、文化、技術、価値観の一元性と多元性という、ある意味で表層的な見方を離れて、より根本的な哲学的、存在論的な問題として考えると、どういふことがいえるのだろうか。哲学における一元性と多元性というテーマは、簡単にいえば「全体と個の関係」という問題であり、その意味では哲学の永遠のテーマともいふべきものである。しかし、この哲学の永遠のテーマを、21世紀の現代世界での存在論として問うとしたなら、どのような視点からアプローチすることがもっとも意義のある問題意識といえるのだろうか。

哲学史において代表的な多元論の存在論を提唱した思想家は、いうまでもなく17世紀ドイツのライプニッツであるが、ここではライプニッツのモナドロジーを独自なしかたで生命論的に展開したと考えることのできる、わが国の詩人宮沢賢治の思想に触れることによって、多元的世界観の現代的ヴァージョンの可能性について考えてみることにしたい。

宮沢賢治については深い仏教的な信仰にもとづいた独自の文学的思想家であることが広く知られているが、その賢治にライプニッツ的な多元性の存在論を読み込むことには、多少の抵抗があるかもしれない。しかし、賢治は「心象スケッチ」と呼びならわしたその詩集において「モナド」という言葉を多用しているばかりではなく、「心象スケッチ」という詩作の方法自体が、モナドロジー - 的な世界観にもとづいたものであることを、その詩集の序文で表明している。

たとえば、次の詩は編集者によって「春と修羅 第三集」に収められることになった無題の詩の一節である。

銀のモナドのちらばる虚空  
すべて青らむ禁欲の天に立つ  
聖く清浄な春の樹の列

そして、次のような『春と修羅』の「序」を読めば、それが「華嚴経」における重々無尽の思想を下敷きにしたものであると同時に、ライプニ

ツツのモナドロジーの存在論そのものでもあることに気づかされるであろう。

わたくしという現象は  
仮定された有機交流電燈の  
ひとつの青い照明です  
（あらゆる透明な幽霊の複合体）  
風景やみんなといつしよに  
せはしくたしかにともりつづける  
因果交流電燈の  
ひとつの青い照明です  
（ひかりはたまち その電燈は失はれ）

これらは二十二箇月の  
過去をかんずる方角から  
紙と鉱質インクをつらね  
（すべてわたくしと明滅し  
みんな同時に感じるもの）  
ここまでたまちつづけられた  
かげとひかりのひとくさりづつ  
そのとほりの心象スケッチです

これらについて人や銀河や修羅や海胆は  
宇宙塵をたべ または空気や塩水を呼吸しながら  
それぞれ新鮮な本体論もかんがへませうが  
それらも畢竟こころのひとつの風物です  
ただたしかに記録されたこれらのけしきは  
記録されたそのとほりのこのけしきで  
それが虚無ならば虚無自身このとほりで  
ある程度までみんなに共通いたします  
（すべてがわたくしの中のみんなであるやうに  
みんなのおのおののなかのすべてですから）

明治の末期に生まれ昭和の初期に没した賢治が、こうした西洋哲学の知識をどのような経緯で吸収したのかという問題については、多くの研

究がなされていて、たとえば当時の哲学史の代表的なテキストである大西祝『西洋哲学史』（明治37年）によって、学んだのであろうという解釈がある。しかし、単なる知識ではなく一個の思想としてのモナドロジ－を、彼はどのような思想家に親炙することによって、身につけることができたのであろうか。

この点にかんしてわたしはまだ詳しい調査を行ってはいないが、とりあえず現在のところ、恐らくは賢治が中学時代に愛読したとされるアメリカのエマソンの『論文集』や『詩集』によって、「華嚴経」の西洋近代的存在論のヴァージョンともいえるライブニッツの思想を身近なものにしたのではないかと考えている。というのも、（これは少々語呂合わせのようなものであるが）賢治の詩には「モナド」の他に「モナドノック（残丘）」という言葉もしばしば使われているが、この言葉はエマソンの代表的な詩の一篇の表題に他ならないからであり、同時にエマソンの自然観や精神論がライブニッツの思想に近親性をもつことは、しばしば指摘されていることだからである。

それでは、エマソン自身はライブニッツ的な多元論をどのように導入したのであろうか。恐らくそこには、エマソンからコールリッジ、カーライルらのイギリスのロマン主義者、イギリスのロマン主義者からシェリング、シェリングからライブニッツという思想の流れがあったのであろう。いずれにしても、賢治を出発点にしてライブニッツまでの多元的世界観の流れを逆に辿ると、時代と地域を超えたこの思想そのものの多元的な現われということに、強い印象を抱かせられることになる。

さて、もう一度賢治に戻って、その多元的世界観の特徴を考えてみよう。

賢治のいう「虚空にちらばる銀のモナド」とは、具体的には空中に舞う雪をさしているが、それがとくに「銀」とされるのは、モナドが「宇宙の生きた鏡」であり、まさしく世界をそれぞれの視点から映し出す存在であるからである。先にあげた一節ではこのモナドの舞う虚空は同時に、「すべて青らむ禁欲の天」ともいわれているが、これはモナドが生きる世界全体が道徳的な完全性を体現しているべきだという、詩人の宗教的信念を表現するものであろう。しかし、この短い一節においても注目されるべきなのは、そうした宗教的信念、感情ばかりではない。むしろ、雪である銀のモナドが作る世界と並列して、「春の樹の列」が対置

されていることである。

賢治の文学世界にあっては、雪の舞う空はひとつのゲル状の世界であり、春の樹の並ぶ世界もまたもうひとつのゲル状の世界であって、それぞれが独立した世界を作りながら、同時に交通する局面をもっている。ここでいうゲル状の世界とは微細な粒子がそれぞれ独立にブラウン運動のようなものを行いながら、全体としてひとつのまとまりをもっている世界のことである。たとえば、『銀河鉄道の夜』の第一章「午後の授業」には、天の川の模型として「中にたくさん光る砂のつぶの入った大きな両面の凸レンズ」が登場するが、これなどが賢治のいうゲル状の世界の典型である。そして、こうした世界どうしがまた、たがいに入れ子状態になって、大きな渦を作っているというのが賢治が描こうとした世界像である。『春と修羅』の「序」に見える「人や銀河や修羅や海胆」は、それぞれにまとまりをもったモナドの世界が、さらにたがいに交流しあい、包みあっている関係を表している。

無数のモナドがひとつの組織をなし、その組織が無数に集まって階層構造をなすという考えは、もともとライプニッツのなかにもあるが、このことはあくまでも有機体としての個々の生命体にかんしていわれることであって、生命体が集まった世界がひとつのシステムをなし、さらに別のシステムと交流しあっていて、この交流の階層が宇宙全体にまで及ぶという考えは、ライプニッツのなかにはない。また、エマソンの自然の考えには、こうした独立するシステムがそれぞれ世界全体を映し出すという思想が含まれているが、それもあくまで人間が生きる世界のなかにある自然についての考えである。

こうした先行する思想と賢治の視点を比較してみると、この宇宙的規模でのモナドロジーの世界が、現代の宇宙生物学（アストロバイオロジー）にも通じるような、きわめて斬新な発想であることが理解されるであろう。アストロバイオロジーでは、地球システムにおける物質とエネルギーの流れのなかに生命の存在を位置づけ、このシステム内部での生命の進化と地球の歴史の相即の論理を明らかにしていく。それは地球の環境問題を人間の利害という狭い関心から解放する視点を提供するとともに、宇宙のうちなる地球と生命についてのわれわれの理解を深化させる。賢次の思想はわれわれの身近な心象風景を導きの系にしながらか、こうした現代的関心を鮮やかに呼び覚ます力をもつと思われるのである。

## アメリカの「世紀末ウィーン文化」研究書

西村雅樹

世紀末ウィーン文化の研究を進めていくうえで、私が影響を受けた書物は少なからずある。しかし特に記憶に残るものとなると数は限られる。その限られた数の書物のなかに、アメリカの研究者によるものが三冊ある。共通した傾向が見受けられるこの三冊について、以下思い出を交えて記してみたい。

書物によってはそれを思い出すとき、読んでいた折の状況が同時に鮮やかに蘇ってくる場合がある。ニューヨークの出版社から発行されたステイブン・トゥールミンとアラン・ジャニク共著の『ヴィトゲンシュタインのウィーン』は、私にとってその種の書物にあたる。愛媛大学の講師だった二十六、七歳のころ、この本を読む手を休めて研究室の窓の外に目をやると、松山城の城山がいつもと変わらぬ静かな姿を見せていた。再び書物を手に取ると、カバーにあしらわれた世紀転換期のウィーンのある大きな広場の写真から、私の想像の翼はまだ見ぬこの街へと広がっていった。こういうことを明瞭に思い出すほどに、この書物から受けた印象は強烈であった。ヴィトゲンシュタインの難解な抽象的な思考が、世紀末のウィーンでくり広げられた様々な文化的活動の中に解放たれ、急に息づきはじめたとも言える印象を受けたのである。ヴィトゲンシュタインの哲学をウィーン文化と関わらせて扱う嚆矢となったと位置づけられるこの書物では、トゥールミンがヴィトゲンシュタインの哲学そのものを論じ、ジャニクが彼を取り巻く文化的環境について記述している。ウィーンについての知識がまだ乏しかった当時の私には、ジャニク担当の章の方がことの他興味深かった。哲学に関わらせて、文学、音楽、美術、建築、思想さらには政治・社会状況まで論じているこの著者は、何を専攻しているのだろうか。ジャニクはカバーの著者紹介によると、哲学を教えているという。専攻の枠を越えて幅広く研究を進める精神風土がアメリカにはあることを、この研究書から私は感じ取った。

学際的もしくは総合的と呼べる研究傾向という点では、ウィリアム・M・ジョンストンの『オーストリア精神』が前書をさらに上回る。「思

想・社会史、1848年 1938年」という副題を持つこの書物では、ハプスブルク帝国末期から大戦間期にかけての文化と社会が、ウィーンを中心としてプラハやブダペストのそれをも含めて扱われている。巻頭に置かれた「ハプスブルク帝国の官僚制」という章は、著者が歴史畑の人であると頷かせるものであるが、それに続く、芸術上の様々な分野が縦横に論じられた「ウィーンの耽美主義」という章や、思想史上の諸問題が扱われた「実証主義と印象主義の奇妙な共生」という章などは、著者の専攻を忘れさせるほどの広がりを見せるものである。広島大学の総合科学部という学際的研究を推し進めようとする場に勤務するようになって間もない時期に読んだだけに、この本から受けた印象はとりわけ強かった。ウィーン大学留学にあたって、私はこの本を留学先で使えるようにした。ウィーンに着いて初めて目にした書店のショーウィンドーには、この書物のドイツ語訳が飾られていた。私は早速それも買い求めた。その後しばらくして、「アメリカ文化センター」でジョンストンその人の講演を聴く機会を得た。講演後の質疑応答での地元の人々の反応は厳しいものであった。詳細は十分には理解できなかったが、ハプスブルク帝国はたとえ第一次世界大戦がなかったとしてもいずれ崩壊する運命にあったというジョンストンの歴史観に批判が集中しているようであった。この認識は『オーストリア精神』においても表明されている。ただし彼がこの書物でもっとも重要なこととして解明しようとしたのは、20世紀の思想に世界的な影響を及ぼした多くの業績が何故に世紀転換期にハプスブルク帝国治下で生まれえたのかという問題である。ジョンストンは、思想史と社会学の方法を使ってこの問題に新たな解答を与えようとした。三十代半ばにしてこれほど浩瀚な書物を著したのは瞠目すべきことである。ただしあまりにも多くの事柄が扱われているために、記述には事典風のところが見られ深みに欠けるとも言えなくはない。

ジョンストンの書物ほど多様な対象を扱っていないとはいえ、一つ一つの対象について十分な議論が積み重ねられているという点では、カール・E・ショースキーが長年にわたる研究成果をまとめた『世紀末ウィーン』が高く評価できる。これは世紀末ウィーン文化の研究に一時代を画した書物と言えるであろう。この本が出版されたのは、私のウィーン留学中のことであった。ウィーンでは英語の本であっても、話題になったものであれば一般の書店で入手できる。訪れたなじみの書店では、い

ずれもこの本は売り切れていた。何軒か回った末、普段は入ることがない書店でようやくこれを手に入れることができた。ウィーンの人々のこの本に対する関心の高さと共に、ウィーンと英語圏の近さも感じさせられた。「政治と文化」という副題を持つこの書物では、自由主義が支配的であった時代に実業の世界で成功を収めた世代に対し、その息子にあたる世代が、自由主義が力を失っていく時代にあって父親の世代とは異なり学問や芸術に関心を移した過程が論じられている。世紀転換期のウィーンの文化を政治状況の変化と関わらせて独自の視点から捉えようとした著作だと言える。かと言って個々の記述は決して硬直したものではない。政治を論の基盤に据えながら、芸術への理解をこれほどに示した書物はそう簡単に著せるものではないと感心させられる。なかでも「リング通り その批判者と近代的都市計画の生誕」と題された19世紀半ばから20世紀初頭にかけてのウィーンの建築史を扱った章は圧巻である。ただしこの章の記述は、オーストリアの研究者による先行研究があって初めて可能になったものでもある。彼らの地道な研究成果なくして、シヨースキーの優れた論考も生まれえなかったのは確かであろう。オーストリア人の著作のなかにはシヨースキーへの批判も見られる。世紀末ウィーンの文化と社会に関し、これまでに挙げたアメリカの研究書のいずれをも上回る規模の著作を著したヘルムート・アンディクスは、その著作の中で『世紀末ウィーン』を評して、「この本はアメリカのピュリッツァー賞を受賞した。しかしウィーンの者から見ると疑わしく思える解釈が、まさにリング通りに関して含まれている」と述べているのである。

シヨースキーへの批判は、先に名を挙げた『ヴィトゲンシュタインのウィーン』の著者ジャンクが、数年前にオーストリアのインスブルック大学のブレンナー文庫の紀要に発表した論文にも見られる。この論文の中でジャンクは、世紀末ウィーンを研究するにあたって明確なテーゼを提示する必要を説き、シヨースキーのテーゼを「自由主義の凋落」とし、自らのテーゼを「批判的モダニズム」と称し、自分自身のテーゼの方が優れていると暗に語っている。これを読んで、競争意識が強すぎると私は感じた。さらにこの論文で疑問に思えるのは、英米の先行研究に余りに強く関心が向けられ、オーストリアをはじめドイツ語圏の研究が軽視されているという点である。ヨーロッパの文化を研究する日本の研究者

にはまず見られないほどの、自国の研究への自信のほどがこの論文からは伝わってくる。それは一つには、アメリカの研究者がウィーンと密接なつながりを持っているということによるのであろう。ジャンクが師事したうちの一人、世紀末ウィーン文学に詳しいハリー・ゾーンは、ナチス支配期に迫害を避けウィーンからアメリカに亡命している。ジャンクがこの論文の中で再評価を促している、ハプスブルク帝国史の権威ロバート・A・カンも同様の経歴を辿っているのである。

このような深いつながりを知るとき、彼我の差は実に強く意識させられてしまう。しかし一方で、元来つながりの薄い文化を研究するのは不利なだけではないとも思える。アメリカの研究者にあっては、ウィーンと基本的に同じ文明に属しているため、文明の違いに基づく発想は見られない。これに対し日本人の場合は、異なる文明を基にして西洋の研究者では出せない新たな観点を提示することが可能と思える。しかも現代の日本にあっては、西洋文明は完全に理解することこそかなわないにしても、もはや縁遠いものではない。先に名を挙げた三冊の研究書のいずれもが日本語に翻訳されているという事実は、それを何よりもよく物語っていると言える。さらにもう一つ例を挙げておこう。ウィーンフィルハーモニー管弦楽団は、ヨーロッパ以外で毎年定期的にツアーを行っている。その一つはアメリカで、そしてもう一つは他ならぬこの日本において。